
バカとハジケとカニクリームコロッケ

紫炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとハジケとカニクリームコロッケ

【Nコード】

N6189W

【作者名】

紫炎

【あらすじ】

題名、変更しました。

作者の思いつきでこの小説は作られました。進むかどうかからないし、原作の作品らしさが出ないかもしれません。なぜなら、作者のその場のテンションでこれは書かれていますから。

異色の中の異色のクロスオーバー小説。その場のテンションの小説についてこれるか!?

第一話・プロローグだと思ったかー！（前書き）

勢いでやった。反省はしている。だが、後悔はしない。

第一話：プロローグだと思ったかー！

憂鬱だ………

今日は一年生になって初の試験召喚獣、召喚日である。普通の人ならわくわくするけど、僕は非常に憂鬱だった。ああ、僕のお宝………

僕の名前は吉井明久。文月学園に通う一年生だ。みんなは僕のことをバカというけど決してバカではない。決してバカではない。大事なことなので二回言いました。だって僕のような365度どこから見ても美少年な僕がどうしてバカなのさ。むしろ、バカなのは僕の隣で暇そうにしている雄二こそがバカなはず鎖骨が外れるように痛い………!!!!」

「バカにバカと言われたくねえよ、バカ」

バカなっ！ なぜ僕の考えていることが分かったんだ！ ハッ、まさか以心伝心！？ よりによって、雄二と！？

「全部声に出てるんだよ、明久（バカ）」

「待って！ 今なんと書いてバカと呼んだの！」

心外だ！ 僕はバカじゃないんだ！

雄二の攻撃から解放されて僕は誓う。いつかこの恨み、晴らしてやる。

「次、Dクラス島田美波さん。吉井明久さん。」

おっと、先生に呼ばれた。雄二め、命拾いしたな。

密かに雄二に対して復讐を誓いつつ、僕は先生のところに向かった。「やり方は教えた通りにすれば問題ないはずです。召喚獣を出したら軽い操作をした後、戦わせてください」

「はい」

僕は先生の指導に返事をするした後、美波と向き合った。

「どんな召喚獣が出るかお楽しみね、吉井」

「そうだね、島田さん」

僕は互いに笑顔で頷きあつて、

『試獣召喚（サモン）！』

と言った。その言葉をきっかけに幾何学？模様がでてきた。まず、美波の召喚獣が召喚された。服装はロシアの軍服のような物を着ていて、レイピアを装備している。凛々しいという言葉がよく似合う格好だ。

対して僕の召喚獣は白い煙に包まれていてまだ分からない。あれ？

いつの間にこんな煙が出てたんだろうか？ 煙をどかさうと近づいてみると、

ヴーーーーー！

バイクの音がした。えっ、バイク？ 嫌な予感がして離れると、関東野菜連合という旗を掲げた野菜の集団が現れた。美波と美波の召喚獣を引いて。

「きゃあああーーーーー！！」

美波が悲鳴を上げて吹き飛ばされた。って、

「何事オーーーーー！！！！！！！！！！？」

思わず僕をこの理解できない状況に突っ込みをいれた。全く理解できない状況に混乱していた。

「ぜんたあーい！ 止まれ！！」

唐突に先頭のにんじんが号令掛け、他の野菜達が止まった。すると（今気づいたけど）張り付けにされていたアフロの人が地面に落とされた。

「次、ピーマン残したら、この程度じゃすまさねーぞ」

アフロの人に脅しを掛けて、

「撤収！！！！」「応っ！！！！！！」

体育館突き破って、どっかに消えていった。

「だって、ピーマンしょぱいじゃんか……………」

涙を流しながらアフロの人はそう言って気絶した。

「……………なんなの」

カオスと化したこの状況で僕の声が異様に響いた。

第一話：プロローグだと思ったかー！（後書き）

さあ、徐々にバカテスワールドを崩壊させていきましょう。

第二話：「今日は目玉焼きにしようかしら？」 「奥様、新鮮な卵は卵かけご飯

前回のあらすじ

「おのれ、ザイガル！ よくも吉井の命を！！」

「ハツハツハ！ 来るがいい、ボボボーボ・ボーボボよ！ 貴様の命を刈り取ってくれる！！」

魔王ザイガルによって命を奪われた相棒、吉井明久。その敵を討つため光の勇者ボーボボは最後の戦いに挑む！

「って、違

う！ デタラメを書くなあ————！！」

第二話：「今日は目玉焼きにしようかしら?」「奥様、新鮮な卵は卵かけご飯

あらずじ

急に現れたアフロマンは何者なのかな

「で、あなたは何者なんだい?」

某人型決戦兵器が登場する司令官のように腕を組んでいるおばさんが聞いてきた。

あの後僕は、気絶したアフロの人を連れて、学園長室に来ていた。普通なら保健室に連れて行くのだが、途中で復活して学園長室に連れていくことになった。えっ、何で行くことになったのかだって。鉄人が強制連行したからだよ。

で、今学園長のおばさんがアフロの人に対して事情聴取している。ちなみに、連帯責任で僕も連れてこられた。

「だってよ、勤君」

「えっ」

いや、僕じゃなくてあなたなんですけど……

「あたしや、あなたに聞いているんだけど。」

「ええ〜! 言わなきゃダメ?」

と僕に指をくわえて聞いてくる。なんで一々僕に聞いてくるの?

「うん、教えて?」

「わかった」

急に真面目になって答えた。やっと話が進む。

「俺の名はボボボーボ・ボーボボ」

ボボボーボ・ボーボボ? 舌噛みそうな名前だなあ。

「ボボボーボ・ボーボボ」

「えっ、うん。今聞いたよ?」

「ボボボーボ・ボーボボ」

「……?」

さつきから自分の名前を何回も言うボーボボさん。どうしたんだろ
う……

「ボボボーボ・ボーボボなのか？」

いや、僕たちに聞かれても……

どう反応すればいいのかわからなくなった。

「まあ、俺の名は真正銘ボボボーボ・ボーボボという名前だ。安心してくれ」

とりあえず、彼の名前はボボボーボ・ボーボボという言いづらい名前だと分かった。なんかこれ聞くだけですごく疲れた。

「じゃ、ボーボボさん「気安く呼ぶなあー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」ええ
ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

僕が質問しようとしたら、怒鳴られた。何で！？

「で、結局あんたは何者なんだい？」

学園長が話を進めようとボーボボに素性を尋ねた。

「だから、ボボボーボ・ボーボボだって言っているだろう？」

名前の事じゃないよ？ ボーボボさん。

「……吉井だったね、ガキンチョ」

むっ！ ガキンチョとは失礼な。僕のような優等生がどうしてガキンチョ扱いされなければならないのだ。

「ガキンチョではありません。吉井明久です」

「じゃあ、吉井。あんたが聞きな」

え〜、めんどくさい。でも、早くしないと帰れないからなあ〜。

しょうがなく尋ねることにした。

「ボーボボさん、僕たちはあなたの素性について聞いています」

「なんだ、そう言ってくれればいいのに」

納得してくれたようで、話してくれた。

自分のこと。

マルハーゲ帝国のこと。

仲間と一緒に旅していたこと。

今日の朝食は卵かけご飯のこと。

山田さんのこと。

(てか、二つほど関係ないよね。まさしく関係のないことである。)

「……………」

学園長は何か考えこんでいて、ボーボボさんはご飯を食べていた。つて、

「何しているんですか！　ボーボボさん！」

「昼飯」

「そうじゃなくて……………」

バンツ！

「学園長！　毛狩り隊と名乗る者たちが生徒達を襲っています！」
もつとツツコミを入れようとしたとき、先生の一人が部屋に叫びながら入ってきた。

つて、毛狩り隊！？　それってさっきボーボボさんが言っていた…………

「ボーボボと言ったね、あんた」

「ああ」

学園長が話しかけるとボーボボさんが立ち上がりながら返事をした。その姿はさつきまでのふざけた雰囲気は感じられない。

「任せてもいいかい？」

「ああ、任せろ。毛狩り隊は俺の敵だ」

と頼もしい返事をした。……………パジャマで。

「……………」

せつかくの格好良さが台無しである。

「よっしゃあー！！　いくぞ、吉井！！」

「えっ！　僕も!？」

いつの間にかガシツと脇に抱えられて、そのまま連れていかれ掛けている。

「ちよつと！　僕は一緒に行くとは一言も……………」

「ツツコミがないとボケが成立しないんじゃないやあ……………」

「!!」

「そんな理由で連れて行くこととするなあ————!!」

そのまま連れて行かれた。

だ、誰か助けて————!!

「…………大丈夫なのでしょうか、学園長？」

「大丈夫さ…………多分」

第二話：「今日は目玉焼きにしようかしら？」
「奥様、新鮮な卵は卵かけご飯

次はとうとうvs毛狩り隊！ 頑張るぞ〜！

「さっさ書けやあ—————！！！」

バキィ！ ゴバァ！

第三話：最強の防具、ロングヘアのツラ！「ちょっと！これ取れないよ！」

「とうとうこの日がやってきた……」

受験番号が書かれた紙を手に吉井明久は掲示板の前にきていた。

この日のために一生懸命努力してきたんだ……さあ、いこう。

お守りを胸に顔を上げて掲示板を見る……

1 1 3 1 2 1 1 1 3 1 2 2 1 1 3 1 2 3 .
.

順番に自分の番号探していく。数字を過ぎるたびに緊張が走る。そして

1 1 3 2 5 4 1 1 3 2 5 5 1 1 3 2 5 7
!!

「やったー！！！！ あった、僕の受験番号があったよー！！！！」

歓喜のあまり泣いて喜んだ。そう、彼は受かったのだ。大学受験に！！！！

「なんだ、夢か……」

第三話：最強の防具、ロングヘアのツラ！「ちょっと！これ取れないよ！」

「ヒヤッハアーーーーー！ 毛刈りの開始だ！ 全員やつちまえ！」
学園に現れて縦横無尽に暴れ回る毛狩り隊。学園の生徒はなすすべもなく毛を刈られていく。……変態、夏川だけを。

「ぎゃあーーーーー！ なんで俺だけ!?!」

夏川のあらゆる箇所の毛を刈り尽くした毛狩り隊は他の生徒に襲いかかる。……男子にだけ。

「なんで限定的なんだあーーーーー!?!?」

だってー、女の子のハゲとか見たくないし?」

「男女差別だーーーーー!?!?!」

そう言つて生徒はハゲになりたくないため、毛狩り隊から逃げ回る。

「隊長、今日の毛刈りは順調ですね」

「そうだな、ボボボーボ・ボーボボがいらないからな」

さすがに異世界まで毛狩り隊を倒しにくるとは思っておらず隊長の……えつと……名前なんつったけ?

「つて、おい！ 作者！ 最初にボスなんだから名前ぐらい決めるよ！」

えく、うくん、面倒くさいからハゲマンでいいや。

「なんだとてめえ！」

とそ・こ・に。

「何かがこつちに来るぞ！」

毛狩り隊の一人が叫んだ。土煙を上げて、何か毛狩り隊に迫ってきている。

「なんだ！ 誰だ！」

みんながよく目を凝らして見てみると、そこには……車輪のついた箱に馬の首がついている乗り物に乗った、ボボボーボ・ボボボーボと吉井明久がいた。

「ボボボーボ・ボーボボだ!?!?!」

毛狩り隊の一人が叫んだ。ここに毛狩り隊宿敵のボボボーボ・ボボボが登場した。ボーボボはそのまま毛狩り隊に突撃して、100点、50点、70点、30点、90点と点数を稼いだ。当然毛狩り隊は引かれて、

「ぎゃあーーーーー!!!」

と叫んで倒れていった。さすが雑魚。さすが名前も与えられない不遇の使い捨てキャラ。

「助かったーーーーー!!!」

毛刈りをされた人たちも礼を言おうと近づいて、

50点、20点、10点、80点、1UP

近づいた人を引いた。しかも1UP

「つて、ええーーーーー!!! 引いちゃうの!!!?」

思わぬ結果に突っ込む明久。

「何で!? 何で引いちゃうの!? 助けに来たんじゃないの!?」

「うざい」

非道い行いである。みんなはマネしないように。

目的地点に到着したのと同時に乗り物は停止した。ボーボボが降りたので、明久も降りて辺りを見回すと、毛狩り隊に囲まれてた。

「囲まれているーーーーー!!!」

毛狩り隊から隊長のハゲマンが出てきて、

「ボーボボ。なぜ貴様がいるのかは知らんが、ここで会ったが百年目。貴様の首を取る!」

ハゲマンの合図と共に残りの毛狩り隊が襲いかかる。

「うわあ、どうしよう、ボーボボ」

「とりあえず、これをかぶっている吉井」

そういつてどこから取り出したか分からないが、ロングヘアのツラを明久にかぶせた。

「……………つて、なにこれ……………」

「毛狩り隊はぶっ潰す!」

「ちよつと、なにこれ! 取れないけど! なんで!?!」

明久の疑問を無視してポーボボは戦闘態勢に入る。

「行くぞー！ー！ 毛狩り隊！」

「ちよつと、無視しないでー！ー！ー！」

毛狩り隊が襲いかかるまさにその時！

「鼻毛真拳奥義！ 鼻毛激烈拳！！！」

ポーボボの鼻毛が鞭のように動き、毛狩り隊を蹴散らしていく！

「ぎゃあー！ー！ー！ー！！！」

「鼻毛 ！！！！？」

雑魚敵は吹っ飛び、明久が突っ込む。まあ、最初見た人はそう思うよね。

「バカな！ 一瞬で全滅だと！？ ありえねえ！」

一瞬で全滅したことに驚く隊長の………えつと………名前なんつったけ？

「ちよ、てめえ！ 何で忘れてやがる！！！」

「ね、ねえ、ポーボボ。今のつて………」

名前不明の話はおいといて、明久がポーボボ尋ねる。

「こら！ 無視するなあ！」

「今のは最強の暗殺拳、鼻毛真拳だ」

「無視するなつていつてるだろ！！！」

「そ、そうなんだ。鼻毛………なんだ」

「おい！ 訴えるぞ、てめえー！！！」

「安心しろ、吉井。お前は俺が守ってやる。」

「訴えれば勝てるんだぞこらあー！！！」

「う、うん。ありがとう。で、このツラなんだけど………」

「聞けよ！ 聞いてくれよ！！ お願いだ「うぜえー！ー！ー！！！！！」

「ぎゃあー！ー！ー！ー！！！！！」

さつきからつるさい名前なしに対して、ポーボボが怒り鼻毛真拳で仕留めた。

「さつきからなんだよ、てめえは！ うぜえんだよ！！ 少し黙つてろやあー！！！！！」

「ぎゃあー！ー！ー！！！」

トドメとばかりに蹴りまくるボーボボ。それを見た明久は

(鬼だ………)

と思っていた。

動かなくなつた名前不明を見てボーボボは

「これで一件落着だな」

と満足した顔で言い切つた。

「いいのかな、こんな終わり方で………」

いいんですよ、この小説では。

第三話・最強の防具、ロングヘアのツラ!」ちよっと!」これ取れないよ!」

不定期更新ですね、これでは。

「さっさと俺をだせー!ー!ー!ー!ー!」

バキィ! グハア!ー!

第四話・買い物は計画的に行いましょう。なぜならいらぬものまで買ってしま

前回のあらすじ

前回を見てください

明久「手抜きだー！ー！ー！！！」

第四話：買い物は計画的に行いましょう。なぜならいらぬものまで買ってしま

「はあ」

僕は今まさに憂鬱だ。商店街を歩きながらため息を吐いた。

あの騒動から数日、ボーボボは僕の家に住候することになった。何でも「召喚したんだから責任を持って」とのことだ。しかもこの一週間の内に“観察処分者”に認定されてしまい、極めつけに住候に来たボーボボが、僕の今までためたお宝の数々を売ってしまったのである。まあ、家計費のためにも何個かは売ろうと思っていたけど、まさか全部売られるなんて……。

今は今日の夕飯を買うために、商店街に来ていた。さて、今日は何にしようか。

「ママ、あのお兄ちゃん髪長いよ」

「そうね。どうしてかしらね」

一組の親子が僕のことを見て一言。

そうなのである。あれからロングヘアのヅラが取れないのである。しょうがないので切るのだが、3分後には元通りである。ボーボボに聞いてみても「知らね」の一点張りである。故に僕は諦めた。

周りの目を気にしながらも食材を買っていき、そろそろ帰ろうかなと家路につこうとしたとき、

「ありがとうございます」

ウィーン

目の前のホームセンターから人が出て来た。その人を見て、思わず僕は驚いた。その人は文月学園一年の学年主席、霧島翔子さんだ。容姿端麗で学園きつての才女。かの姫路さんに並ぶ美少女だ。

どうして彼女がここに？ 僕が驚いているとさらに驚くべき事が起こった。

なんと彼女の頭にオレンジ色の丸いとげとげが生えた物体が刺さっ

ていたのだ。

.....

「何か刺さっている!!!?」

明らかに帽子ではない意味不明で未確認生命体?が彼女の頭に刺さっていた。僕は慌てて近寄って、声を掛けた。

「霧島さん!? 頭のそれは何!?!」

「? 誰?」

知らない人にあつたとばかりに質問された。ああ、そうか。当然だった、初対面だったね!

「僕の名前は吉井明久って言うんだけど、今はそれどころじゃなくて.....!」

「吉井.....。それで何のよう?」

「その頭のそれ! 何!?!」

「これ? コレは.....」

霧島さんは器用に目だけを上に上げて、視線を戻した。

「帽子」

「いやっ、絶対帽子じゃないよそれ!?!」

「帽子」

「だから帽子じゃないって!」

ああ、もう! 埒があかない! 僕は帽子?を方を見て、

「そこの.....何かは分からないけど君! 絶対帽子じゃないでしょ!?!」

声を掛けた。生物かどうかは分からないけどね！　すると、帽子は目を開いて、

「俺、帽子じゃねーの！！？」

「当たり前じゃん！！！」

めっちゃ驚いていた。おいおい……

「ふっ、小娘。やるじゃねーか……、この俺を帽子扱いするとは…

…」

「？　帽子じゃなかったの？」

「いや、どう見ても帽子じゃないでしょ」

霧島さんの目ってどうなっているんだろうか。学園の主席の意外な一面を見た気がした。

「さては貴様、ハジケリストだな？」

「？　ハジケリスト？」

何それ？

「ふっ、では、ハジケというものを、この首領^{とん}パッチ様が、教えてやる、っと」

霧島さんの頭からとげを抜いて、地面に降り立った首領パッチ君。つてか、君は男であっているのかな？

ハジケるってなんだろうか……。僕と霧島さんは身構えた首領パッチ君を前に同じく身構える。

首領パッチ

あれはクリスマスの日だった……

「ちくわー！　ちくわ、いかがですか！　おいしいですよ！」

俺は貧しい家庭の為にちくわを売って日々を過ごしていた。だがおいしいちくわもクリスマスでは不評。普通の日でもほんのちよつとしか売れないのに、今日は今までにもまして売れなかった。

「どうしよう、このちくわ全部売らないと家には帰れない……」

困りきった俺の目線にある建物が見えた。
その建物には「クリスマスパーティー」と書かれた看板があった……

会場は人で賑わっていた。今か今かとパーティーの開始を待っている。

『みなさん、今日はようこそおいでくださいました』

「おっ、始まった」

放送が入ってみんな待ってましたと声を出す。

『ちくわパーティーへ』

「ちくわパーティー!?!」

だが予想に反して、変なパーティーが始まった。

「みんなー! ちくわ食おうぜー!」

そこに先ほどちくわを売っていた首領パッチが現れた。

……

静まるパーティー会場に首領パッチは近くにいる人に近づくと、

「おらあ、食えや! ちくわ食えや!」

「もががが!」

ちくわをありつたけ食わした。警備員が近づき押さえつける。

「何をやっとするか、貴様は!」

そこに首領パッチが泣きながら縋り付き、

「火事なんだよ! 家が火事で大変なんだよ!」

と怒鳴った。

「家が火事なんだよ、大変なんだよ、だから、ちくわ買ってくれよ、そして食えよ」

ちくわー！ー！……

明久 s i d e

……
うん。

いや、言いたいことはたくさんあるんだけど、一言で表すと、だから何？

意味不明なこの回想がハジケと言うものなのだろうか？ 僕が困惑している、隣で沈黙を守っていた霧島さんが

「ぐはッ！」

吐血した。って、ええー！ー！！

「大丈夫、霧島さん！？ どこか痛い！？」

「ぐふっ、これがハジケ……。理解した」

理解できたの！？ どこが！？

「ふっ、ダメージは深いな。そんなんじゃあ俺様には勝てないぜ」

そう言ってちくわをたばこ代わりに使う首領パツチ君。なぜちくわがたばこ扱い？

「まだ私のハジケは終了していない」

「無理だな。さっきハジケを理解したお前に勝ち目はない」

よろよろになりながらも霧島さんは立ち上がり、首領パツチ君を見据える。端からみれば何かの勝負シーンと思われるが、実情は実に意味不明な戦いだから格好付かない。

「私のハジケを……食らえ！」

霧島翔子

あれは冬の雪が降る日のことだった……。

雄二が他の女性に話しかけられている所を目撃してしまった。私は聞き耳を立てて聞いてみると、

「坂本は朝ご飯の目玉焼き、醤油派？ それともソース派？」

「そうだな、俺は醤油派だな」

と会話していた。

これを聞いた私はすぐさま家に帰り、目玉焼きを焼いて醤油を掛けようとした。だが、

「醤油がない……」

醤油がないことに気づいた私はすぐさま醤油を買いに行ったのである。近所のスーパーにたどり着いた私はすぐさま醤油が売ってあるコーナーに向かい、醤油を取ろうとしたが、

「やべっ！ トランスフォーム！！」

と言って醤油は全部変形して、飛んでいった。

「醤油……」

醤油を買えなかった私はそのまま家に帰っていった……

明久 side

……うん……。

途中までは理解できたんだけど、途中から意味不明になって何が何だか分からなくなってしまった。理解できないことがハジケなのか？

「フッ」

すると、首領パッチ君が微笑を浮かべ、

「完敗だくばあ！」

吐血した。

……

「ありがとう。あなたのおかげで、私は新しい道を開けた」

「なあに、どうってことはないって。俺もこんなハジケリストに出
会えてよかったぜ」

二人がガシツと手を組んで、友情を深めていた。

……………意味不明

理解できない状況に僕の思考は停止していた。

第5話：「ヒロインの座は私のものよ！」（前書き）

前書き

前回のあらすじ

ハジケに目覚めた霧島翔子。相對する首領パッチと深まる友情……

二人は友情を超えて、愛を深め合う。

首領パッチ「翔子……」

翔子「首領パッチ……」

二人の愛の導く先は……

明久「いや、あり得ないから」

題名変えました。

明久「なんでカニクリームコロッケが消えないの？」

おいしいじゃん

明久「そんな理由!？」

第5話：「ヒロインの座は私のものよ！」

本文

本前の前回のあらすじ

首領パッチによってハジケに目覚めた霧島翔子であった。

「んで、てめえは誰だよ？」

首領パッチは明久に尋ねる。

「あ、僕は……」

この小説のヒロインの吉井明久君です。

「え！ ちょ、いつ決まったの!？」

君がポーボボに突っ込みをいれた直後だよ？ 知らなかったの？

「知らないよ！ ってまさかこのロングヘアのヅラって……」

そうだよ、アキちゃん計画の第一歩だよ。やっぱりポーボボワールのヒロインは可愛くないと。

「やっぱりかあああああ！！ 薄々気づいていたけどこれはその布石か!!！」

よく分かってるじゃないか あと後ろ見てみ？

「え、何……」

「キイイイイ！ 何でヒロインはこのパチ美様じゃないのよ!」
そこには化粧した首領パッチがハンカチを噛みしめながら、怒っていた。

「キモッ!」

おもはず明久は気持ち悪いと叫ぶ。

「キモイですってえ！ 最低ね！ やっぱりこの子はヒロインにふさわしくないわ!!！」

怒りながら首領パッチは殴りかかる。と、そこに一人割ってはいる。

「やめて首領パッチ。『彼女』を殴らないで!」

「ぐっ、翔子！そこをどけ！俺はお前を殴りたくない！」

「き、霧島さん」

そう、霧島翔子である。彼女は明久を守るために割ってはいつたのだ。明久もそれに見とれる。だが忘れてはならない、霧島は明久を『彼女』といったことを。

「どうしてだ！ どうしてそいつを庇うんだ、霧島！」

「『彼女』がいなくなったら……」

「あれ？霧島さん。さっき僕のこと、彼女って……」

違和感に気づいた明久は突っ込みをいれるが、無視して話は進む。

「私が雄二のヒロインになれない」

「そんな問題かい！僕のことを心配してたんじゃないの！？」

「うん」

「即答されたあああああ！！」

一瞬でも友情を感じた気持ち返してとばかりに叫ぶ。

「大丈夫だ！俺がヒロインになってもそいつは好きにならねえ！」

「ならいい」

「ええええええええ！！」

あっさりと明久を差し出した霧島に驚く明久。

「フッフッフ……これでヒロインの座は私のものよ」

「あ、あわわわ……」

首領パッチはにやけながら明久に迫る。明久はすっかりパニックつて腰が抜けた女の子みたいな体勢でへたり込む。見ていて未確認生物に補食され掛けているか弱い女の子みたいだ。

「お死になさあーい！！」

「きゃあああああ！！」

襲いかかる首領パッチ。顔を伏せて悲鳴を上げる明久。それを見ているだけの霧島。もはや明久に希望はないのか。

「何やってんだ teme エー……！！！！」

「グハア！」

突如声が聞こえて首領パッチは吹き飛ばされた。明久が顔を上げるとそこには、

「大丈夫か明久」

「ボーボボ！」

鼻毛の貴公子、ボボボーボ・ボーボボがいた。間一髪明久を首領パッチから守ったみたいだ。

「どうしてここに？」

「帰りが遅いからな。迎えに来たんだ」

頼もしいボーボボの姿を見て明久はやっと落ち着いた。

「？ 誰？」

霧島が誰か尋ねる。

「俺の名前はボボボーボ・ボーボボだ」

「……言にくい」

「まあ気軽にボーボボと言ってくれ」

「じゃあボーボボ「気安く呼ぶなあー！！」えっ!？」

おきまりの挨拶をするボーボボ。とそこに

「誰だあ！ 人のことを蹴飛ばした野郎は！」

首領パッチが復活して怒鳴る。明久は小さい悲鳴を上げてボーボボの後ろに隠れる。こうしてみると男の子には見えません。

ボーボボと首領パッチの目があつた瞬間、二人はあつと驚く。

「お、お前は……」

「あ、お前は……」

二人は駆け出し、涙を流しながら互いの名前を呼ぶ。

「首領パッチい~~~~~!!」

「ボーボボ~~~~~!!」

二人は感動の再会とばかりに涙を流しながら抱擁を……

「このどさくれがああああ！！！！」

…… せずに殴り合った。

「ええええええええ!!」

思わぬ展開に驚く明久。横ではポップコーンを食べながら感動する

霧島。どこに感動する要素があるのだろうか。

殴り合つて互いに倒れる二人。だがすぐに起き上がって抱きつく。

「でもそんなアンタが好きなんやあ！」

「ウチもや！」

コレを見た明久は呆れながら

(何、今の茶番劇)

とりあえず分かったことは首領パッチがボーボボの仲間だったと言
うことだ。

「でさ、ボーボボ。この人？は誰？」

「ああ、コイツは首領パッチ。俺の仲間の一人で非常食だ」

「非常食なのそれ！？」

仲間のにその扱いはどうかと思う明久である。とその直後、

「毛刈りの開始だああああ！ ヒイハアアアアアア！」

雄叫びを上げて毛狩り隊が現れた。毛狩り隊は片っ端から人の髪を
刈っていく。

「毛狩り隊だあ！？ 全滅したんじゃないのかよ！」

「どうやらこの世界ではまだいるようだな……」

ボーボボは明久の方を向いて言い放つ。

「明久、離れるなよ」

「うん！」

ボーボボの一言に返事をする明久。そうだと明久は霧島に振り向き
言う。

「霧島さんも離れないで」

「大丈夫」

そう言つと霧島は袋から鞭を取り出して構える。

「私も闘える」

「えっ、そうなの！」

ハジケを理解できる人つてみんな闘えるのかな。ボーボボ達は

「よつしゃあ！ 行くぞオラあああああ！」

とかけ声一つで敵に向かう。……転がりながら。

「そう行くのおおおお！？」

ボーボボは最初の一人に攻撃！

「わんぱくアタック！」

「ぐわあ！」

次に首領パッチが攻撃！

「わんぱくアタック！」

「ぎゃあ！」

最後に会社員の鈴木さんが攻撃！

「わんぱくアタック」お前は違う「ぎゃあ！」

が、関係ない人なのでボーボボに仕留められた。

「見ろ、ボーボボ・ボーボボだ！」

「ペットもいるぞお！」

「誰がペットだ、コラア！」

「ぎゃああああ！」

ボーボボ達に気づいた毛狩り隊が殺到するが、首領パッチをペット扱った毛狩り隊を一人殴り飛ばした。

「くそつ、なら貴様からだ！」

ボーボボ達では無理と思った人が霧島に殺到する。だが霧島は慌てず、鞭を振るう。

「愛の鞭真拳奥義……」

霧島が鞭で渦を描くように振るう。

「ハリケーンビバップ！」

その瞬間、毛狩り隊が吹っ飛ぶ。

「ぎゃあああああ！！！」

「くそつ！ 何なんだよコイツら！」

「強すぎだろ！」

悠然とたたずむ三人に守られながら、明久は

「凄い……」

と呟いていた。

「……お前も闘えたんだな」

「私に触れて良いのは雄二だけ」

「おっしやあ！ このまま一気に行くぜ！」

三人は一気に毛狩り隊の駆除に取りかかった。

第5話：「ヒロインの座は私のものよ！」（後書き）

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189w/>

バカとハジケとカニクリームコロッケ

2011年11月7日12時02分発行